

館長あいさつ

扇面と短冊、この講座の指導講師である画家の下川辰彦先生は 2022 年度の講座のテーマをこのように設定され、13 名の受講生のみなさんの課題作品を紹介するのが、この展覧会の目的です。講座期間は 2022 年 4 月から 23 年 3 月の全 26 回、作品は絹本の扇面と短冊、そして紙本他の自由制作です。本展図録には受講生の作品と共に制作中のスナップ画像、制作工程、アンケート集計を付し、講師の下川辰彦先生と渡邊美喜先生の作品をご紹介します。

中部大学民族資料博物館の特別講座「古典絵画」は、市民のみなさんに開かれた生涯学習の場であり、本格的な実技指導を通じて「古典絵画」の技法を学ぶことができる講座になっています。講師の下川辰彦先生（日本美術院特待、中部大学民族資料博物館外部専門委員）は、2019 年度に「金屏風の小下図制作と作品」、また 20 年度秋と 21 年度春に「四季を描く～金箋紙・銀箋紙」をテーマに指導され、その丁寧な実技指導の成果は受講生の作品によく反映されているところです。

古典絵画としての扇面、短冊については、本展図録に原田千夏子（中部大学民族資料博物館学芸員）が寄稿しているように、日本絵画の特異な形式をもち、ながく継承された技法を有していますが、わたくしはいま、そうした画面形式に憧れたひとりのフランス画家を紹介したいと思います。印象派の父といわれるエドゥアール・マネ（1832-1883）です。マネはその晩年、3 点の扇面の形式による油彩画を制作していることが知られています。その 1 点は茨城県近代美術館に所蔵される《白菊の図》（1881 年）です。扇面のなかに白い菊の花と赤い菊が鮮やかに描かれています。マネの後継者である印象派の画家たちは日本美術の影響を受けた多くの作品を残していますが、やはり扇面の画面形式は重要であったようです。ドガやゴッコンの作品にそれはあらわれています。マネと印象派の画家たちが憧れた日本、その絵画の魅力的な形式のひとつが扇面であった事実は見逃すことができないでしょう。扇面はマネ以降、グローバルな画面形式になったのではないのでしょうか。

古典絵画、それは決して古い絵画という意味ではありません。ながい時間と空間をめぐる重要な文化遺産なのです。この展覧会を見るみなさんは、受講生の作品を鑑賞しながら、古典絵画の愉しみを感じていただきたいと願っています。

最後になりますが、コロナ感染症が未だ完全終息していないなか、制作に励んでくださった受講生のみなさん、また指導にあたられた下川辰彦先生と渡邊美喜先生に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

2023 年 3 月吉日

荒屋鋪 透

中部大学民族資料博物館長
人文学部教授

指導講師あいさつ

2022 年度受講生の課題制作は、前年度の課題制作であった「箋紙（色紙）」（四季をテーマに 4 枚組の制作）に続いて、一人あたり絹絵の小品で扇面作品 1 点を中心に配置し、その左右に短冊作品 2 点を並べる展示を前提とした 3 点を一式とした作品制作としました。3 点の作品を合わせて展示する姿を念頭におくことによって、モチーフの選び方や色彩の関係性などの構成に様々な工夫するよう意図しました。

また、作品自身の表現だけでなく、成果発表展を前提に、額装の種類を統一する他、一方では作品のサイズや額装の内側に挿入するマット紙の色は各自の自由としました。マット紙は、単に白色にするだけでなく、作品に応じて色の組み合わせを作ることで、作品はまた別の表情を見せてくれるのです。展示作品をみていただければ、その効果をみてとることができるでしょう。こうしたいくつかの工夫によって、展示会場は、全体で統一感がありながら、それぞれの作品の存在感を示す、面白い空間にすることができたのではないかと思います。

また、一点一点は小品ですが、絹絵の性質を活かした技法を用いて仕上げている点についても注目してください。絹絵は、画面の表面からだけでなく、裏面からも彩色を施し、繊維質の画面を通して色層を重ねて表現することができます。この古画から日本の絵画が継承してきた裏彩色の技を丁寧に行うことで、作品が室内の照明を受けながら穏やかな光を内側から発するように表現することができます。描き手は、このような古画から継承されてきた絵の品格に憧れ続け、その表現に近づけるための探究に手間を惜しみません。

そのため、教室においては、これまでと同様に下図用の和紙を皆で切り分け、各自が刷毛を使って礬砂引きをして準備しました。パネルに絹を張る作業も自分たちの手で行い、日本画特有の材料に親しむ機会をできるだけ持つようにしました。こうした準備期間も、材質を手で確認しながら作品の構想を練るためのよい時間となります。筆を持つ時間だけではなく、様々な手作業の段階からすでに制作が始まっているのです。私たちの生活は、日々驚くほどの速さで機械化が進んでいるからこそ、この教室では、直に触れた手の感触を記憶していただきたいと思っています。

2023 年 3 月吉日

下川 辰彦

日本美術院特待
中部大学民族資料博物館外部専門委員